## 6/14 Mon.

第２回 川崎マチネーシリーズ
ミューザ川崎シンフォニーホール　14時開演
KAWASAKI MATINÉE SERIES No. 2 / Muza Kawasaki Symphony Hall 14:00

## 6/15 Tue.

第643回 名曲シリーズ
サントリーホール　19時開演
POPULAR SERIES No. 643 / Suntory Hall 19:00

指揮
Principal Conductor
**セバスティアン・ヴァイグレ**（常任指揮者）–p.5
SEBASTIAN WEIGLE

ヴァイオリン
Violin
**アラベラ・美歩・シュタインバッハー** –p.6
ARABELLA STEINBACHER

コンサートマスター
Concertmaster
林 悠介
YUSUKE HAYASHI

**ヴェルディ**
VERDI
**歌劇〈運命の力〉序曲**［約８分］–p.8
"La forza del destino" Overture

**メンデルスゾーン**
MENDELSSOHN
**ヴァイオリン協奏曲** ホ短調 作品64［約26分］–p.9
Violin Concerto in E minor, op.64
I. Allegro molto appassionato – II. Andante –
III. Allegretto non troppo – Allegro molto vivace

［休憩］
[Intermission]

**ブラームス**
BRAHMS
**交響曲 第１番** ハ短調 作品68［約45分］–p.10
Symphony No. 1 in C minor, op. 68
I. Un poco sostenuto – Allegro
II. Andante sostenuto
III. Un poco allegretto e grazioso
IV. Adagio – Più andante – Allegro non troppo ma con brio

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：ミューザ川崎シンフォニーホール（川崎市文化財団グループ）（6/14）
※6/15《名曲シリーズ》では日本テレビ「読響プレミア」の収録が行われます。



## 6/19 Sat.

第237回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール　14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No. 237 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

## 6/20 Sun.

第237回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール　14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No. 237 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

## 6/22 Tue.

非破壊検査 Presents 第29回 大阪定期演奏会
フェスティバルホール　19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT IN OSAKA, No. 29, presented by Non-Destructive Inspection Co., Ltd / Festival Hall 19:00

指揮
Principal Conductor
**セバスティアン・ヴァイグレ**（常任指揮者）–p.5
SEBASTIAN WEIGLE

ピアノ
Piano
**反田恭平** –p.6
KYOHEI SORITA

コンサートマスター
Concertmaster
小森谷巧
TAKUMI KOMORIYA

**ワーグナー**
WAGNER
**歌劇〈タンホイザー〉序曲**［約14分］–p.11
"Tannhäuser" Overture

**シューマン**
SCHUMANN
**ピアノ協奏曲** イ短調 作品54［約31分］–p.12
Piano Concerto in A minor, op.54
I. Allegro affettuoso
II. Intermezzo : Andantino grazioso
– III. Allegro vivace

［休憩］
[Intermission]

**チャイコフスキー**
TCHAIKOVSKY
**交響曲 第５番** ホ短調 作品64［約50分］–p.13
Symphony No. 5 in E minor, op. 64
I. Andante – Allegro con anima
II. Andante cantabile, con alcuna licenza
III. Valse : Allegro moderato
IV. Finale : Andante maestoso – Allegro vivace

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
共催：公益財団法人東京都歴史文化財団　東京芸術劇場（6/19、20）
特別協賛：非破壊検査株式会社（6/22）
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会（6/19、20）
協力：コジマ・コンサートマネジメント（6/22）
※6/22《大阪定期演奏会》では読売テレビによる収録が行われます。

# 6/29 Tue.

第609回 定期演奏会
サントリーホール　19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No. 609 / Suntory Hall 19:00

| | |
|---|---|
| 指揮<br>Principal Conductor | **セバスティアン・ヴァイグレ**（常任指揮者）–p.5<br>SEBASTIAN WEIGLE |
| クラリネット<br>Clarinet | **ダニエル・オッテンザマー** –p.7<br>DANIEL OTTENSAMER |
| ファゴット<br>Bassoon | **ソフィー・デルヴォー** –p.7<br>SOPHIE DERVAUX |
| コンサートマスター<br>Concertmaster | 長原幸太<br>KOTA NAGAHARA |
| **グルック（ワーグナー編）**<br>GLUCK (arr. WAGNER) | **歌劇〈オーリードのイフィジェニー〉序曲** ［約10分］–p.14<br>"Iphigénie en Aulide" Overture |
| **R. シュトラウス**<br>R. STRAUSS | **クラリネットとファゴットのための二重小協奏曲**<br>ヘ長調［約18分］–p.15<br>Duet-Concertino for clarinet and bassoon in F major<br>I. Allegro moderato<br>– II. Andante<br>– III. Rondo : Allegro ma non troppo |
| ［休憩］<br>[Intermission] | |
| **フランツ・シュミット**<br>FRANZ SCHMIDT | **交響曲 第４番** ハ長調［約45分］–p.16<br>Symphony No. 4 in C major<br>I. Allegro molto moderato<br>– II. Adagio<br>– III. Molto vivace<br>– IV. Tempo primo un poco sostenuto |

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：**アフラック**



指揮

**セバスティアン・ヴァイグレ**
（常任指揮者）

SEBASTIAN WEIGLE, Principal Conductor

## ドイツの名匠が振る
## 充実の3プログラム

© 読響

オペラとコンサートの双方で活躍が目覚ましい本格派。得意のドイツ物からブラームス、シューマン、ワーグナーらの作品で腕を振るうほか、フランツ・シュミットの交響曲に光を当てるなど、多彩な3プログラムを指揮する。

1961年ベルリン生まれ。82年からベルリン国立歌劇場管の首席ホルン奏者として活躍後、巨匠バレンボイムの勧めで指揮者に転向。2003年にフランクフルト歌劇場でR. シュトラウス〈影のない女〉を振り、ドイツのオペラ雑誌『オーパンヴェルト』の「年間最優秀指揮者」に選ばれた。04年から09年までリセウ大劇場の音楽総監督を務め、ベルク〈ヴォツェック〉やワーグナー〈タンホイザー〉など数々の名演奏を繰り広げた。07年から11年までバイロイト音楽祭にてワーグナー〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉を指揮し、世界的注目を浴びた。08年からフランクフルト歌劇場音楽総監督の任にある。11年に同歌劇場管が『オーパンヴェルト』誌の「年間最優秀オーケストラ」に選ばれ、15年、18年、20年にも同歌劇場が「年間最優秀歌劇場」に輝くなど、その手腕は高く評価されている。

これまでに、メトロポリタン歌劇場、ベルリン国立歌劇場、ドレスデン国立歌劇場、バイエルン国立歌劇場などに客演を重ねるほか、ザルツブルク音楽祭にも出演、また、ベルリン放送響、ウィーン響などを指揮し、国際的に活躍している。読響には16年8月に初登場。オペラでは19年の東京二期会のR. シュトラウス〈サロメ〉（第28回三菱UFJ信託音楽賞受賞）、今年2月のワーグナー〈タンホイザー〉などで共演し、いずれも好評を博した。

6/14 川崎
6/15 名曲
Artist

©Sammy Hart

ヴァイオリン

**アラベラ・美歩・シュタインバッハー**

ARABELLA STEINBACHER, Violin

古典派から現代曲まで幅広いレパートリーを持ち、国際舞台の第一線で活躍する実力派。ドイツ・ミュンヘン生まれ。ミュンヘン音楽大学で名教師チュマチェンコに師事し、ギトリスからも教えを受けた。これまでに、オーケストラではバイエルン放送響、ロンドン響、パリ管、ウィーン響、ニューヨーク・フィル、シカゴ響、ボストン響など、指揮者ではマリナー、メータ、シャイー、ブロムシュテット、ゲルギエフ、ルイージ、ネルソンスらと共演している。録音は専属契約を結ぶペンタトーン・クラシックスから多数出ており、最新盤「ヴィヴァルディ：四季＆ピアソラ：ブエノスアイレスの四季」も好評を得る。使用楽器は、日本音楽財団貸与のストラディヴァリウス「ブース」（1716年製）。読響とは2018年3月以来の共演となる。

6/19 土曜マチネー
6/20 日曜マチネー
6/22 大阪定期
Artist

クラシック音楽界に革命をもたらすカリスマ。1994年生まれ。モスクワ音楽院を経て、現在はショパン音楽大学で学ぶ。第81回日本音楽コンクール優勝。15年ロシア国際音楽祭でマリインスキー劇場デビューを果たす。これまでにN響、都響など国内の主要楽団のほか、ベルリン・ドイツ響、ロシア・ナショナル管、ワルシャワ国立フィル、RAI国立響などと共演。19年に同年代の若手演奏家を集めたMLMナショナル管（21年にジャパン・ナショナル・オーケストラに改名）を創設して全国ツアーを開催したほか、新レーベル「NOVA Record」を設立。20年にはウィーン楽友協会にデビュー。TBS系テレビ「情熱大陸」、テレビ朝日「徹子の部屋」「題名のない音楽会」など多くのメディアに出演。第27回出光音楽賞受賞。読響とは20年12月以来、4度目の共演となる。

ピアノ

**反田恭平**

KYOHEI SORITA, Piano

©Julia Stix

クラリネット

**ダニエル・オッテンザマー**

DANIEL OTTENSAMER, Clarinet

クラリネット界を牽引する俊英。1986年ウィーン生まれ。2005年に名クラリネット奏者の父（エルンスト）、弟（アンドレアス）とアンサンブルを結成し、活動を展開した。09年からウィーン・フィルの首席クラリネット奏者を務めている。ソリストとしても活躍し、これまでA. フィッシャー、マゼール、ドゥダメルらの指揮でウィーン・フィル、N響、シモン・ボリバル響などと共演。15年にザルツブルク・モーツァルテウム管と共演したモーツァルト〈クラリネット協奏曲〉でCDデビューを飾った。室内楽ではバレンボイム、マイスキーらと共演。創設メンバーとして活動するアンサンブル「ザ・フィルハーモニクス」は、オーパス・クラシック賞2018を受賞。読響とは、16年のヴァイグレ指揮《土日マチネー》以来の共演となる。

6/29 定期
Artist

6/29 定期
Artist

世界の一流オーケストラと共演する若き実力派。1991年フランス生まれ。リヨン国立高等音楽院を卒業後、ハンス・アイスラー音楽大学、カラヤン・アカデミーで学ぶ。2013年からベルリン・フィルの首席コントラファゴット奏者を務めた後、15年にウィーン・フィルの首席ファゴット奏者に就任。13年、ミュンヘン国際音楽コンクールで2位（1位なし）を受賞する他、多くの国際コンクールで受賞している。15年にはボンでベートーヴェン・リング・アワードも受賞した。ソリストとして、ウィーン・フィル、バイエルン放送響、ミュンヘン室内管、SWR響、シュトゥットガルト放送響、ベルリン・コンツェルトハウス管などと共演したほか、室内楽ではバレンボイム、パユらと共演。今回が読響初登場。

©Benjamin Brinckmann

ファゴット

**ソフィー・デルヴォー**

SOPHIE DERVAUX, Bassoon

## ヴェルディ
## 歌劇〈運命の力〉序曲

オペラの序曲には、序曲だけでも本編に劣らないほど大きなドラマを描く規格外の傑作がある。たとえば、ベートーヴェンなら序曲〈レオノーレ〉第3番であり、ロッシーニなら〈ウィリアム・テル〉序曲、そしてジュゼッペ・ヴェルディ（1813〜1901）では〈運命の力〉序曲がそれに該当するだろう。これらは劇場にとどまることなく、オーケストラのコンサートでしばしば演奏される人気曲となっている。

1861年、ヴェルディのもとにロシアから新作オペラの依頼が届く。イタリアの国会議員に選ばれ、前作〈仮面舞踏会〉の初演から2年を経ていたヴェルディは、ふたたびオペラへの情熱を取り戻してこれを受諾する。新作の題材にはリバス侯爵アンヘル・デ・サーベドラの悲劇『ドン・アルヴァーロ、または運命の力』を選んだ。ヴェルディは精力的に筆を進め、新作〈運命の力〉を携えてロシアに向かう。ヒロイン役の歌手の降板でいったんは初演が延期されたものの、1862年11月の初演は大成功を収めた。しかし、ヴェルディは初演直後から作品を改訂する必要を感じていた。1869年、あまりに絶望的な結末が書き改められた改訂版〈運命の力〉がミラノで上演され、ここでも成功を収めることとなった。現行の序曲はこの改訂版のために作曲されたものである。

侯爵の娘レオノーラと騎士ドン・アルヴァーロは相思相愛の仲。ふたりが駆け落ちしようとする際に、ピストルの暴発から侯爵が命を落とす。ふたりは離れ離れに逃げるが、復讐（ふくしゅう）心に燃えるレオノーラの兄の追跡により、過酷な運命にさらされる。序曲の冒頭で鳴り響く金管楽器の重厚な強奏が悲劇を予告する。木管楽器が奏でる第4幕の二重唱、弦楽器による「祈りの動機」などを経て、緊迫感みなぎる怒涛（どとう）のフィナーレへと突き進む。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1861年、68〜69年／初演（歌劇）：1862年11月10日、サンクトペテルブルク、マリインスキー劇場、改訂版初演（歌劇）：1869年2月27日、ミラノ・スカラ座／演奏時間：約8分
楽器編成／フルート、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チンバッソ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル）、ハープ2、弦五部



## メンデルスゾーン
## ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64



歴史的大ヴァイオリニスト、ヨーゼフ・ヨアヒムは1906年に75歳の誕生日を祝う席でこう語って、フェリックス・メンデルスゾーン（1809〜47）の傑作の性格を巧みに言い表した。

「ドイツ人は4つのヴァイオリン協奏曲を持っている。もっとも偉大で確信に満ちた作品がベートーヴェン。ブラームスも真摯（しんし）さではベートーヴェンに匹敵する。もっとも豊麗で魅惑的なのはブルッフ。しかし、もっとも内面的な、心の宝石はメンデルスゾーンだ」

作曲は1844年。ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の音楽監督であったメンデルスゾーンは、かねてより同楽団コンサートマスターであるフェルディナント・ダーヴィトのために協奏曲を作曲しようと考えていた。作曲にあたっては、ダーヴィトに技術的な助言を求めている。翌年、ダーヴィトの独奏とデンマークの作曲家ニルス・ゲーゼの指揮により初演された。当時、ゲーゼはライプツィヒでメンデルスゾーンと親交を結び、ゲヴァントハウス管弦楽団の副指揮者を務めており、体調不良により欠席した作曲者に代わって初演の指揮をとりおこなった。

**第1楽章**　アレグロ・モルト・アパッシオナート　弦楽器とティンパニによる短い伴奏に続いて、すぐに独奏ヴァイオリンが主題を提示する。通例では終結部の直前に置かれるカデンツァが、展開部と再現部の間に配置される。

**第2楽章**　アンダンテ　前楽章の終わりからファゴットの持続音を引き継いで、独奏ヴァイオリンが甘美な主題を奏でる。

**第3楽章**　アレグレット・ノン・トロッポ〜アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ。前楽章から短い序奏をはさんで、晴れやかなファンファーレとともに主部へ。独奏ヴァイオリンの名技を伴いながら、朗らかで活発な楽想が繰り広げられる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1844年／初演：1845年3月13日、ライプツィヒ、ゲヴァントハウス／演奏時間：約26分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

## ブラームス
## 交響曲 第1番 ハ短調 作品68

1853年、若きヨハネス・ブラームス（1833〜97）はデュッセルドルフのシューマン家を訪れる。ブラームスはシューマンとその妻クララにピアノ・ソナタ第1番を披露し、その才能を強く印象づけた。「この若者は本当に驚くべき世界をあらわにした。……そこには変装した交響曲のようなソナタがあった」。しかし、ブラームスが交響曲を完成させたのは、それから20年以上も後のことである。

1855年、ブラームスは交響曲の作曲に着手したとシューマンに手紙で伝えた。だが、この構想は実現には至らず、作品はピアノ協奏曲第1番へと形を変えた。

1862年、ブラームスはクララ・シューマンの前で交響曲第1番の第1楽章をピアノで弾いて聴かせている。この初期稿では、第1楽章冒頭の重々しい序奏は添えられていない。その後、さらなる長い道のりを経て、ようやく1876年に作品が完成する。

ベートーヴェンの衣鉢（いはつ）を継ぐ交響曲として、初演は大きな期待をもって迎えられた。「大衆に好まれるというよりは厳粛な作品で、くりかえし聴くことが求められる」という初演の評からは、作品への敬意と若干の戸惑いが伝わってくる。

**第1楽章**　ウン・ポコ・ソステヌート〜アレグロ　ティンパニの連打を伴う緊迫感あふれる序奏に情熱的な主部が続く。

**第2楽章**　アンダンテ・ソステヌート　淡く柔和な弦楽合奏に寂寞（せきばく）としたオーボエのソロが続く。後半ではヴァイオリンのソロが活躍。

**第3楽章**　ウン・ポコ・アレグレット・エ・グラツィオーソ　通常なら3拍子のメヌエットかスケルツォが続くところだが、2拍子の流麗な楽章が配置される。

**第4楽章**　アダージョ〜ピウ・アンダンテ〜アレグロ・ノン・トロッポ・マ・コン・ブリオ　アルペンホルン風の旋律や弦楽合奏の高らかに歌うような主題等、多様な要素からなる壮麗なフィナーレ。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1855年〜76年／初演：1876年11月4日、カールスルーエ／演奏時間：約45分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部





## ワーグナー
## 歌劇〈タンホイザー〉序曲

〈タンホイザー〉（全3幕）は、ドイツ・ロマン派オペラの巨匠リヒャルト・ワーグナー（1813〜83）が、〈さまよえるオランダ人〉（1843年初演）に続いて完成した、比較的初期のオペラ。ザクセン宮廷劇場（現在のドレスデン国立歌劇場）の指揮者を務めていた1843年から45年にかけて作曲され、1845年にドレスデンで初演された。長大で終始音楽が途切れない「楽劇」を創作する以前に書かれた本作は、一般的なオペラに近い構成がなされていることと相まって、ワーグナーのオペラの中でもとりわけ広く親しまれている。

作曲家自身の台本による物語は、「13世紀初めのテューリンゲン。愛欲の女神ヴェーヌスのとりこになった騎士で吟遊詩人のタンホイザーは、女神がいるヴェーヌスベルクから元の世界に戻るが、歌合戦で官能を賛美して顰蹙（ひんしゅく）を買う。ローマへ懺悔（ざんげ）の旅に出たタンホイザーだが、法皇の許しを得られない。しかし、乙女エリーザベトの身を犠牲にした祈りによって救済される」といったもの。官能的悦楽とキリスト教的禁欲の両世界の対比を通して、愛の根源を探る内容となっており、一つの結論ともいえる「自己犠牲による魂の救済」は、ワーグナーの生涯を貫くテーマにもなった。

序曲は、本編の主題や動機を用いてオペラ全体を集約した音楽。大きく三つの部分から成り、敬虔（けいけん）な「巡礼の合唱」主体の音楽が、官能的なヴェーヌスベルクの音楽を挟む形をとっている。最初はアンダンテ・マエストーソ、4分の3拍子。まずホルンなどによる「巡礼の合唱」の主題、続いてチェロによる「悔恨の動機」が登場し、次第に力を増した後、アレグロ、2分の2拍子のヴェーヌスベルクを表す音楽に移る。ヴィオラが出す「歓楽の動機」、弦楽が出す「ヴェーヌス賛歌」を主軸とした賑やかな場面が続くが、やがて「巡礼の合唱」の主題が戻り、金管楽器を中心にした壮麗なクライマックスが形成される。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1843〜45年／初演：1845年10月19日、ドレスデン／演奏時間：約14分
楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル、シンバル、タンブリン）、弦五部

## シューマン
## ピアノ協奏曲 イ短調 作品54

ドイツ初期ロマン派の代表格ロベルト・シューマン（1810〜56）が残した唯一のピアノ協奏曲。シューマンは1827年から39年にかけて四つのピアノ協奏曲に着手し、いずれも未完成に終わっていた。しかし、1840年にピアニストのクララ・ヴィークと結婚した彼は、翌41年、交響曲第1番の完成に自信を得て、クララのために〈ピアノと管弦楽のための幻想曲〉を作曲した。同曲は1843年に改訂され、さらに1845年、3楽章の協奏曲へと発展することになった。そして、第3楽章、第2楽章の順に作曲がなされ、先の〈幻想曲〉を改訂した第1楽章を加えて全体を完成。内輪で試演後の1846年1月にクララの独奏で公開初演され、その成功はシューマンの名声を大いに高めることとなった。

本作は、こうした経緯と、「ヴィルトゥオーゾのための協奏曲は書けない」と語ったシューマンの生き方が相まって、内省的な「協奏的幻想曲」風のテイストを有している。とはいえ技巧的にも容易でなく、名技性と叙情性とダイナミズムが一体となった、ロマンティックかつ独創的な作品となっている。

**第1楽章**　アレグロ・アフェットゥオーソ　ソナタ形式だが、オリジナルが幻想曲だけに即興的な趣が強い音楽。鮮烈な出だしに続いて木管で奏される柔和な旋律を実質的な唯一の主題としながら、多様な変化を遂げていく。ちなみに、主題のC－H－A－A（ドーシーラーラ）の動きは、シューマンの理想を具現する架空の団体「ダヴィット同盟」でのクララの呼び名「キアリーナ（Chiarina）」の読み替えだという。

**第2楽章**　アンダンティーノ・グラツィオーソ　「間奏曲」と付された、感傷的で穏やかなへ長調の緩徐（かんじょ）楽章。移行部を経て、休みなく終楽章へ。

**第3楽章**　アレグロ・ヴィヴァーチェ　第1楽章の主題と関連した堂々たる第1主題に、3拍子だが2拍子にも聞こえる第2主題をまじえて、華やかな楽想が展開される。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1845年／初演：1846年1月1日、ライプツィヒ、ゲヴァントハウス／演奏時間：約31分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ



## チャイコフスキー
## 交響曲 第5番 ホ短調 作品64

交響曲第4番から約10年、国外滞在が多く、創作活動は若干停滞気味だったピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840〜93）だが、この間に西欧でブラームス、ドヴォルザーク、マーラーらと知り合い、近代的なオーケストラ演奏にも刺激を受けていた。そして1888年、好環境の村に居を構えたのを機に創作意欲が湧き上がり、3か月ほどで本作を完成。初演当初は批評家の評価が低かったものの、西欧を中心に支持を獲得し、ロシアの全交響曲の中でも屈指の人気作となった。

本作は、チャイコフスキー自身が第1楽章冒頭の旋律を「運命、もしくは神の摂理への完全な服従」と表現したことから、「運命」がテーマだと解釈されており、その旋律は「運命主題」と呼ばれている。主な特徴は、運命主題が“固定楽想”として各楽章に登場する点、第3楽章にワルツを用いている点、暗い運命主題が終楽章では長調に姿を変える点など。これらにはベルリオーズの〈幻想交響曲〉の影響も窺（うかが）えるが、全体をみれば、同作曲家ならではの歌とパッションと迫力にあふれた名曲だ。

**第1楽章**　アンダンテ〜アレグロ・コン・アニマ　最初にクラリネットで奏されるのが「運命主題」。主部は、歩むような第1主題とのびやかな第2主題を中心に、ダイナミックな展開を遂げる。

**第2楽章**　アンダンテ・カンタービレ、コン・アルクーナ・リチェンツァ　ホルンのソロで出される主題を中心とした、甘美で陶酔的な緩徐楽章。だが、盛り上がりの頂点を運命主題が遮る。

**第3楽章**　ワルツ：アレグロ・モデラート　艶美（えんび）なワルツ主部に小刻みな動きの中間部が対比され、最後に登場する運命主題が夢気分を現実に引き戻す。

**第4楽章**　フィナーレ：アンダンテ・マエストーソ〜アレグロ・ヴィヴァーチェ　長調の運命主題で始まる荘重な序奏から短調の主部へ移り、荒々しく刻まれる第1主題と木管で出される第2主題を中心に激しく進行。凱旋行進曲のような終結を迎える。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1888年／初演：1888年11月17日、サンクトペテルブルク／演奏時間：約50分
楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部



6/19 土曜マチネー
6/20 日曜マチネー
6/22 大阪定期
Program Notes

## グルック（ワーグナー編）
## 歌劇〈オーリードのイフィジェニー〉序曲

クリストフ・ヴィリバルト・グルック（1714〜87）は、オペラのドラマ性を高めた18世紀における改革者として知られている。ウィーンで成功を収めた後、パリでの成功を目論み、ウィーン時代の声楽の弟子でフランス皇太子妃となっていたマリー・アントワネットの助力を得て、1773年に転居。半年間の徹底したリハーサルの後、満を持して発表した最初のオペラが〈オーリードのイフィジェニー〉であった。

ギリシャの大将アガメムノンは、出帆のため娘イフィジェニーを生贄（いけにえ）に捧げると女神に約束する。事情を知ったイフィジェニーは愕然（がくぜん）とするが、父の愛を信じ自らの命を差し出す決意を固める。これに心を動かされた女神は、イフィジェニーを救い出帆の風を吹かせる、というのがおおよそのあらすじである。

19世紀半ばにはワーグナーが自らスコアに手を入れたドイツ語版を作成し、それまで忘れられていたこの作品は、ドイツ各地で演奏されるようになる。この時ワーグナーは、イフィジェニーが祭司としてトーリードに赴くよう結末を書き換えたので、グルックの別のオペラ〈トーリードのイフィジェニー〉は本作の後日譚となった。父アガメムノンを殺したその妻クリュテムネストラに復讐するエレクトラの話もまた、本作の後日譚と言えるだろう。〈エレクトラ〉（R. シュトラウス）は来年2月にヴァイグレと読響が取り上げるが、今回の選曲はその伏線でもある。

序曲は荘厳な開始に導かれ、勇壮なテーマがユニゾンで力強く歌われる。様々な感情を一つの流れに組み込んでいく手さばきに、グルックの天性が表れている。ワーグナーは18世紀の軽快なオーケストレーションを、重厚なロマン派のそれに書き換え、さらに序曲を独立した楽曲としても演奏できるように、冒頭部のテーマを用いたコーダを加えている。

〈江藤光紀 音楽評論家〉

作曲：1772年／初演：1774年4月19日、パリ（原作）、1847年、ドレスデン（ワーグナー編曲版）／演奏時間：約10分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット3、ホルン4、トランペット3、ティンパニ、弦五部



## R. シュトラウス
## クラリネットとファゴットのための二重小協奏曲 ヘ長調



ドイツの歌劇場が戦火で次々に焼け落ちる中、リヒャルト・シュトラウス（1864〜1949）は自己の創作の終わりを自覚しはじめる。1943年の〈カプリッチョ〉でオペラの筆を措（お）き、その後の創作は“音楽史とは何の関係もない、時間つぶしのための手首の運動”だと語り、作品番号をつけるのも止めてしまう。この最晩年に〈メタモルフォーゼン〉（1945）、〈オーボエ協奏曲〉（1945）、〈四つの最後の歌〉（1948）の他、管楽器のための傑作群が生まれているのは驚きだ。凝縮された編成のうちに極めて高度な作曲技法が開陳される。気まぐれな遊戯のように聞こえるが、そこに研ぎ澄まされたセンスが生きている。

〈クラリネットとファゴットのための二重小協奏曲〉は、1947年、ルガーノの放送局の依頼で書かれた。当初は独奏者のそれぞれをアンデルセンの童話の登場人物に見立てるという構想があったようで、独奏部には豊かな音の身振りも感じられる。伴奏に弦楽とハープを伴うが、弦楽部はそれぞれ5部からなる独奏と合奏に細分化され、グラデーションのような色合いの変化が楽しめる。全体は三つの部分からなるが、通して演奏される。

**第1部**　アレグロ・モデラート　弦のソロ・セクションがシンプルなモチーフをこだまさせ（このモチーフは様々な素材を紡ぎだす）細やかなテクスチュアを織り上げると、クラリネットが清廉な主題を提示する。ややあっておどけたファゴットが加わり、クラリネットも茶目っ気たっぷりに応答する。**第2部**　アンダンテ　弦のトレモロを背景にファゴットがのどかな主題を歌い、チェロ独奏が重なって、クラリネットが縁どる。短いカデンツァを経て**第3部**　ロンド（アレグロ・マ・ノン・トロッポ）へ。遊び心に満ちたロンド主題の後、ロンド主題にはさまれるクプレではハープが彩りを添え、弦のソロ、トゥッティ（合奏）がそれぞれ異なるリズムを重ねる中、独奏二人が優美な旋律を奏でる。

〈江藤光紀 音楽評論家〉

作曲：1947年12月16日完成／初演：1948年4月、ルガーノ／演奏時間：約18分
楽器編成／ハープ、弦五部、独奏クラリネット、独奏ファゴット

## フランツ・シュミット
## 交響曲 第４番 ハ長調

フランツ・シュミット（1874〜1939）は現在のブラチスラヴァ（スロバキア）にあたるプレスブルクに生まれた。家族と共にウィーンに移住してからはウィーン楽友協会音楽院（現・ウィーン国立音楽大学）で作曲をロベルト・フックスに、チェロをフェルディナント・ヘルメスベルガーに学んでいる。ウィーン宮廷歌劇場でチェロを演奏する一方、母校でも教鞭を執り（最終的に学長になった）、指揮者、ピアニスト、オルガニストとしても活躍した。作曲家としては4曲の交響曲の他に、オペラ〈ノートルダム〉、オラトリオ〈七つの封印の書〉などがある。

ウィーンの歌劇場のチェリストだった時期は、マーラーの音楽監督期とも重なっており、またウィーンで活躍した同年生まれの作曲家にはシェーンベルクがいるが、彼らよりもよりダイレクトに伝統に関わり、その延長上で創作したシュミットは、生前はアカデミズムの代表格として、この二人よりもはるかに尊敬されていた。ウィーン・フィルの団長だったオットー・シュトラッサーは「…ちょうど私の若い時代に年輩の同僚たちが音楽理論の教授であったブルックナーのことを畏敬の念をもって話したように、私の同年輩の多くの同僚たちがフランツ・シュミットの弟子であり、熱烈な信奉者であった」（芹澤ユリア訳）と回想している。しかし戦後になると、新ウィーン楽派やマーラーの再評価と反比例するように、シュミットの作品は忘れられていった。ナチに迎合したと見られた点も忌避感情を高めたと思われる。

私生活も必ずしも幸せとは言えなかったようだ。最初の妻は1919年に精神病院に入院し、出てくることはなかった。また、その妻との間にもうけた一人娘エンマは1932年、出産の際に命を落としている。

交響曲第４番はこの娘へのレクイエムとして、同年から翌年にかけて作曲され、34年にウィーンで初演された。全体は大きく四つの部分に分かれており、それぞれは交響曲の定型（アレグロ楽章・緩徐（かんじょ）楽章・スケルツォ・フィナーレ）を踏襲しているものの全てが切れ目なく演奏され、重苦しい気分とその苦しみから解放されるかのような夢幻的な境地が交互に出現する意識の連続体を生み出している。冒頭に現れるテーマを全体にちりばめ統一感を出すほか、第４部を第1部の再現のように扱うことによって、単に四つの楽章を連結しただけではない形式の強化を図っている。こうした点にシュミットの、単純な保守とは言いきれない大胆さ・新機軸がうかがえる。

**アレグロ・モルト・モデラート（第1部）**は長大なトランペット・ソロで始まる。彼方から響いてくるような不安定で落ち着かない旋律は、全曲をまとめる主題としても機能している。ティンパニが重々しいリズムを刻む中、弦がこの主題を引き継いで拡大していくと、ハープの分散和音を伴う新しい主題が登場、聴き手を幻想へと誘っていく。鬱屈（うっくつ）と夢幻という両極端の気分を往還しつつ、音楽は大きな波動を描いてクライマックスへと高まり、エネルギーを放出して静まっていく中から独奏チェロが姿を現して、**アダージョ（第２部）**へと移行する。独奏チェロが絶えず上向への意思を示す清涼な旋律を奏でると、やがて軍楽隊風のリズムが聞こえてきて、荘重な葬送行進曲が始まる。悲哀の高まりの後、再び独奏チェロに導かれ清廉な旋律が回帰する。**モルト・ヴィヴァーチェ（第３部）**は8分の6拍子のスケルツォ風の動きの上で、第1部で示された二つの主題がこだましあう。**テンポ・プリモ・ウン・ポコ・ソステヌート（第４部）**では冒頭の禍々（まがまが）しい主題をまずホルンが提示、第1部の素材を次々に再現していく。やがて現実の重荷をほどかれ天界へと導かれるように、音楽は徐々に解放感を帯びていき、トランペット・ソロが「人がその予兆の元に生まれ、生きた後、あの世へと引き継いでいく最後の音楽」（シュミット）を奏で、安らかに終わりを告げる。

〈江藤光紀 音楽評論家〉

作曲：1932〜33年／初演：1934年1月10日、ウィーン／演奏時間：約45分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、エスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、銅鑼）、ハープ2、弦五部